

宗教と福祉実践

——在家信者中田騷郎の事績から

志 田 利

はじめに

いま福祉の領域では民間福祉事業のあり方が問われている。その経営体としての社会福祉法人がこれからも存在感のある事業体としてありつつけるにはどうあったらよいのかという課題でもある。現在のところ日本の福祉施設の経営体は公立のもの以外は社会福祉法人であることを原則としている。

(1) 社会福祉法人とは

その事業の公共性から営利を目的とする企業ではない、とされているのである。公益法人のなかでも特に公共性の高い法人として位置づけられている。公からの措置委託としてはば一〇〇%の運営費を税からの援助として受けている。その代わり、収入のすべてを利用者へのサービスに供することとされており、事業解散のとき

はすべての財産を公に寄付する。理事は無報酬が原則、市民を代表して福祉に奉仕する立場をもとめられているのである。すなわち収益をあげる、という考え方は通用しない世界である。効率的に資金をうごかしてもうけるということはない。資本の論理の外の領域として機能してきた。経営者も職員もひたすら利用者に献身的に生活支援をおこなうことに使命がある。第二次大戦後五〇余年、福祉施設はこうして運営されてきた。この中で本来の使命にそう事業を展開して市民の支持をえてきたのは宗教的なバックボーンをもって創業した先達を有する法人に多くみうけられる。他人のために、弱き人々のために献身することを己の信条と重ねて日夜労働することとをいわず、己の資産をも投じてその運営にあたり、給料をえることもいさぎよしとしない、こんな姿勢が市民の支持をえて寄付もあつまる、という内容である。およそ昭和四〇年代以前に発足して

いる法人はこうした実態を有しているところが多い。宗教法人ともいえる清らかな経営である。公の法による援助の少ないときに誕生した法人群の姿である。

(2) 法人のモデル

その基本のところで仏教、キリスト教、それぞれの宗教がささえとなり、利用者の心身両面の豊かな生活を守ってきた。社会福祉法人はこうした法人がモデルであり、公の施設よりもより内容のあるレベルの高いサービスを提供することが期待されてきたのである。そのために個人や法人の寄付金は天井なしで損金算入がみとめられる、という他の公益法人にはない恩典が与えられている。すなわち公的な税による補助にあわせ金銭労力両面で市民の協力をえることで経済的にもゆとりのある経営、そして各々のニーズに応じて格別のサービスを提供できる。ここに本来公の責任で運営されるべき福祉施設を福祉法人に委託することが意味をもってくる。国民のなかでも弱い立場にある人々がより恵まれたサービスのもとで生活できるという期待である。

おそらくは戦前から宗教のバックをもつ福祉施設がよい運営をすることで、市民の評価を高め、福祉施設とはああいふ奉仕の人がやってくれるからうまくいくんだ、との信頼をえてきたのであろう。そのことがもとになって今日の法のなかでも一定の役割をになう形に位置づけられたものであろうと考えられる。施設法人の原点である。

(3) 後発法人は

ところが国の財政力も豊かになるにしたがい、福祉施設を建設する場合も手厚い助成が得られるようになる、ほぼ一〇〇%の助成である。となると土地さえあれば資金はなくともこの施設経営に参加できるという事態になっていく。女性の社会参加がすすむなかで「ボストの教ほど保育所を」といわれ設置促進がもたられた保育所経営、さらに高齢者の急増にともなう寝たきりや痴呆のおとしよりのための特別養護老人ホーム経営の分野で顕著になる。どこの市町村にも福祉法人の経営する施設がおめえすることとなるのである。この経営者のなかには昨日まで工場を営んでいたがうまくいかない、牧場や田畑を生活の糧としてきたが先がみえない、それなら福祉施設でも、という参入者が昭和五〇年代以後急速にふえていく。

そこには宗教心もなければ、利用者に奉仕することが生きがいなどという精神もみあたらない例が多くみられる。福祉施設も経営である、と公言することにもなる。理事長がオーナーとして責任があるのに奉酬がないのはおかしい、公からうけとった措置費を節約して借金の返済にあててはいけないなどの制約はとっぱらえ、というような声が大きくあがってくる。企業経営の感覚とすこしも違わない考え方である。そして役所の方だけむいて仕事をすればよい、役所の監査さえ無事すめばあとはうまくやればよい、という経営感覚になっていく例が少なくないのである。そこには公より手厚い

サービスを提供する、という考えよりも、役所の定めた最低基準をみたしていればよい、という次元でとまることになる。地域住民の支援による寄付金も集まらない。全くの役所の下請け機関としての施設という実態を示してくる。民間社会事業としての特徴をもって法や規則にしばられる公の施設では対応しきれない新しい住民の希望にこたえるサービスをとりあげるといふ事例もすくなくなるのである。福祉法人のなかで法律により助成をうけている事業以外に独自のサービス事業をとりこんでいる例はまことにすくない実情につながる。

社会福祉事業の運営の基本を定める社会福祉事業法のなかで

- ① 二四時間利用者の生活をささえる収容施設を第一種事業
- ② 保育所など通所の施設や昼間だけのデイサービス事業を第二種事業 とわけ

- ③ その他の住民の期待にこたえる公益事業

- ④ そしてこれらの事業を財的にたすける収益事業と区別されている。

ほとんどが①のみ、または②のみの事業体が多い。全国一万六千という法人の数の多さも一法人一施設という実態を示している。

まして③や④の事業をとりくむ特異性のある法人は少ないという実状のなかで古くからの法人はともかく社会福祉法人特有の性格をもつものがまことに少ないということになるのである。

(4) 介護保険法誕生

ところがこの現状を大変革がせまられる事件がおきる。介護保険法の誕生である。

年々増大する高齢者、その高齢者のための医療費の増加は医療保険をあぶなくする。一方、ねたきりや痴呆のおとしよりのための特別養護老人ホームの急増は老人福祉法のもとでの税金では対応しきれない費用増をもたらし。これらの事態に対応するため医療と福祉の分野から介護の部分を取りだして利用者の保険料をもとにする社会保険方式の法を独自に作ることにつながったのである。

この法の誕生はいろんな課題をもたらしているがその一つがサービス提供体の増とサービスの多様化を期待して一般企業の算入を認めたことである。社会福祉法人と同じ土俵の上で資本の論理をもととする企業が採算のとれる介護市場として本格的に入ることを認めたのである。同じレベルのサービスを提供するだけならば特別の恩典はいらないとなるであろうし同じ事業をやるのだから企業にもその恩典をあたえよといわれたときに抗弁しにくいことになるのである。ここであらためて社会福祉法人のこれからの存在意義はなにかを問われるのである。

- 1 昔から宗教的なベースで奉仕的に運営されて来た福祉法人
- 2 補助制度充実とともに誕生した後発の福祉法人
- 3 市場開拓の意欲をもって算入した企業

おおざっぱに分けられるこの三種の事業体が市民の前である意味で競争しあう場面が展開するのである。

(5) 宗教心をもとに

このときに昔からの老舗ともいえる法人が大いに期待できるのではないか、というのが私の考えである。なぜなら介護保険を先頭に福祉サービスは公の措置から利用契約の形に変わるからである。利用者がどのサービス、どの施設を選ぶかは自由になるからである。どの病院を選ぶか、と同じことになる。よい医者がいるか、この病気はどこが専門か、よい看護婦がいるのはどこか、食事はおいしいか、という評価点の高い病院に患者があつまると同じなのである。いずれ施設もふえればますますその傾向が強まる。そのとき賢明な利用者の目にとまりやすいのが先にあげた宗教色のある施設、あそこなら親切でよい世話をしてくれるにちがいないと選ばれることになろうと考えるのである。宗教色をだすことを遠慮してきたこれまでとは違いいにその特色を出して行くときが来ている。

この考えを具体的に示すために

- 1 福祉と宗教のかかわりの歴史 その概要をまとめてみる
- 2 これからの社会福祉法人のあり方として宗教をベースにとりくむことの有利さをあげてみる。

3 福祉の世界で宗教心をもとに活躍した先達のひとり、中田驥郎のプロフィールをさぐってみる。

4 これからの寺に地域のセンターとしての活動、特に福祉的活動をとりくむことを提案してみる。

の四点について筆者なりの考えをあげてみたい。第二次大戦後福祉

関係法の発展充実のなか、大きく後退した宗教色、それが少子、高齢社会のなかで福祉対象者の増大とともに公的施設では対処しきれない状況になっている今日である。ここに民間社会福祉事業の役割がもとめられる。そしてその運営体であるべき社会福祉法人には本来の福祉の心をもとにした高い理念がもとめられる。そのときあらためて宗教心というものをあらためて大事にしていこう。そのとりくみをもとめられているときがきているのではないか、というのがこの研究ノートを書く動機なのである。おおかたのご批評をいただければ幸いである。

一 宗教と福祉の歴史素描

日本の国としての福祉施策の歴史は仏教を基に諸施策を展開した「聖徳太子」に原点をおくのが福祉の領域の常識である。そして民間の福祉活動の始祖は、布施屋など庶民のくらしにたすけとなる事業をすすめた「行基」であるとするのも異論のないところであろう。「行基」はもちろん仏教の布教をめざす僧職であった。

(1) 仏教とキリスト教と

以来日本の福祉事業は仏教の教えをベースに時代のながれのなかで地域のニーズにこたえてすすめられてきた、といえるであろう。いまものこる「寺子屋」「駆け込み寺」などの聞きなれた言葉がその証である。

寺はそれぞれの庶民の生活のなかで、文化や暮らしのセンターと

しての役割をはたしてきたのであろう。江戸幕府が寺々に住民の戸籍をあずけたことなども寺が庶民から信頼を受け、なにかあれば寺に集まる、といった地域に根を下ろしたことが実績になったとみられるのである。

さらに中世に入ってからキリスト教の伝来とともに新しい福祉事業に大きな役割をになう。特に、「らい」や「結核」など人々のいみきらった病いに苦しむ人々のための救済活動は目につくはたらきである。

(2) 隣保相扶

そして庶民が毎日の生活を維持するための一番のたのみは生活共同体であり、生活共同体のもとでもある家族にあまるところを地域共同体による相互扶助活動でカバーしあってきたのが実情、その社会的認知をえてきたのが隣保事業としての五人組などの組織である。また具体的活動が郷倉などの共同穀倉にみられるたすけあいである。なにより家族のささえあいが大きなものであったことは深沢七郎の「檀山節考」にえがかれたおりんのお山ゆきの姿にあらわれている。かぎられた食料のなかで家族みんなが生きつなぐため己の前歯を折ってまで山にでかけることを急ぐ。この死に対して動じない泰然とした姿は、家族がこれで食いつなげるという確信があったからではないか。種族保存本能のようなおもいがもとでは、と考えられるのである。こうした家族や地域の共同体を形成する根本には仏教の考え方が色濃くあったとみられる。

(3) 国の責任

国が本格的に福祉の領域にとりくむのは救護法などの先例もあるが、第二次大戦終戦の後新しい憲法のもと人権尊重、そして民主主義を標榜することになってからである。憲法二五条にもとずいて生活の最低限の保障は国の責任でおこなうとした生活保護法の誕生がそれである。つづけて児童、障害者、老人、母子家庭と対象者別の福祉法が成立、その保護や更生のための施設も税の力で運営されるようになったことは自明のことである。

そして戦前から民間で宗教をベースにすすめてきた福祉施設も「社会福祉法人」資格のもと公費による措置委託をうける事業として位置付けられる。と同時に運営の面で宗教色をだすことはいけな、という枠をつくられていくのである。国からしめされた基準にもとづいて施設建設も運営もすすめるをえないという形になっていくなかで全国どこにいても金太郎飴のごとく同種の施設は同規模で同じような内容でおこなう事業体となっていくことになる。ここには宗教は創業者の名とともに語られるだけで日々のくらしには無縁のような存在となるのがおかたである。こうして五〇年余の歳月がすぎ福祉と宗教のかかわりはまことにうすいものとなっている。国の補助施策が充実するとともに福祉もビジネスになるという視点で、利用価値の下がった田畑を提供して社会福祉法人をつくり特別養護老人ホームなど時代のニーズにこたえる施設を公費をもたにして建設し、専門職でもない人物が施設長となる、という事例が

珍しくはない実情となるなかでますます宗教色のある又人間を大事にするといった考え方とは遠く、福祉の専門性などは語れない福祉事業の姿が大きく登場してくるのである。

(4) 社会保険方式に

こうしたなかで高齢社会の到来とともに税によるだけの福祉は限界である。利用者に応分の負担を、と社会保険方式による「介護保険法」が誕生する。国民的関心がまことにうすいなかでひっそりと生まれた法であったが、だれもが保険料を納入する義務を負うということが知られるとともに、介護の社会的なうらづけが必要とする基本のところではなく利用しないのに金をとられる、といったまことに低い次元の論議がにぎやかなのが現在の状況である。国民を代表する立場で法律をつくりあげた国会議員までが保険料をおさめる時期をおくらせよなどの主張をするほどにだれもが関心をもたなかった未熟な法でもある。

二 社会福祉法人のあり方

ともかく法は法、できあがりうごきだしたなかであきらかになってきたことの1が社会福祉法人という名のもとにある民間社会福祉事業のありかたなのである。介護保険のサービス提供体をふやしていくために民間企業の算入が認められた、ということにともなう課題である。いまのところ在宅サービス部門にかぎられているが全国規模の企業体がめざましい活動をくりひろげている。これがいずれ

は施設運営の分野でも企業算入をとの声があがっている。すると古くから手厚い公的補助に守られて運営されてきた福祉法人の施設と、後発の企業による施設の違いはなにか、と問われる。同じサービスではない質の高い長い伝統でつくられた利用者の立場にたつてのサービスが提供できる、というのがおおかたの特長としてあがる意見である。しかし企業といえどもビジネス、評判のよい事業を展開しなければ商売にならない。とより専門性の高い職員をあつめ、質の高いサービスを提供することは可能である。そうしなければならたないヒューマンサービスなのである。とするとどこに本来の福祉法人の特長を鮮明にできるのが課題となるのである。

(1) 生活者の視点で

まずは法律でさだめられたサービスをこえた部分のサービスを創りあげすすめることであろう。庶民の視点でその生活を守り豊かにするために必要か、核家族化した弱い力しかない家族をささえる社会的支援策はなにか、をたしかめ、その策をとりくむため地域の人々と手をくんで具体的活動にはいることである。

ひとつ高齢社会の対応について考えてみても介護保険法により提供される、在宅サービスはあくまでこの地域でも共通に必要とされるいわば最低限のサービスにかぎられているのである。これをこえるもの、補うもの、地域の特殊性から必要とされるサービスはそれぞれの自治体か地域社会の力によるしかないのである。このところがあまり理解されていないきらいがある。介護保険がうまくす

めば高齢社会対策はすべてO・Kといううけとめかたがまだないといえないのである。

(2) 非営利性

まさに先駆的、また創造的なサービスを積極的に取り組むこと、商業主義ではとてもできないサービスにすすんで汗を流すことである。ここに非営利性の特徴をみせることができるのである。さらにいえば戦後の民間社会事業振興のためはじめられた国民運動である、共同募金によせられた寄付も、法の保護のある施設に配分することはやめるべきであり、こうした先駆的な事業にこそ配分されるべきものである。でなければ国民的支持を維持することは困難である。おつきあいとしての赤い羽根になってしまう。社会福祉法人はこうした新しい採算があやふい、しかし住民がもとめている、という事業にとりくむこと、これが生き残る策であり、壁をこえる方法である。が実際にはなかなかこれまでのあたえられた役割を忠実に、お役所の指示のとおりに行きとおるという姿勢からはとりくみえないことであろう。悪いことをしなければつづきまい、という保守の考えになりがちである。

(3) 宗教的人間観

ここであらためて提案したいのは原点にもどるひとつとして宗教的な人間観ともいう福祉の心の再認識である。人間の相手をさせていただく、というヒューマンサービスの役割に大きな価値をみいだすこと、その基本のところにその人間個人の人生観ないしは宗教観

といったものがうらづけとしてあることがのぞましい、と考える。そのうえに福祉という職業を支える倫理観、専門職観というきちんとしたベースがオーナーにも従事する職員にも豊かに保たれていることが大事な要素となるのではないか。この七月にモントリオールで開かれた国際社会福祉会議においても次のようなことが確認されている。

福祉の基本は「人権および社会正義の原理にある」とし「グローバルゼーションや技術革新によって先進国、発展途上国を問わず、社会的な秩序は大きく変化している。この変化は新たな社会問題を生み出している。この問題に対応する役割がある」としている。

(4) 新しい社会問題

日本の今日のなかでもいわゆる路上生活者や精神障害者の社会参加、労働力としてきている外国人を円滑にうけいれていくことなどのいくつかのテーマは法律をこえたところの問題である。高齢者は金をもっている、その負担をもつとふやせという声のかげで東京という大都会のなかでも一〇〇〇人をこえる多数の孤独死が発生している。高齢者の孤独死は阪神大震災による被害者のなかで仮設住宅に生活を余儀なくされたなかで二五〇人をかぞえた、というショッキングなニュースがながれたのだった。それが日常の生活のなかで何倍もの数で発生しているという現実がある。これはまさに他人ごとではないのであり、行政の手にあまることなのである。グローバルなテーマにあわせローカルなテーマもわれわれの生活のこ

くみじかなところで問われる課題が多くあるのである。これに前向きにとりくむことが民間社会福祉事業家の役割であり、宗教的なベースをもつ人の有利な世界であるといつてよいのではないだろうか。

(5) 先達の足跡を

かつて国の施策が十分およんでいないなかでとりくんだ福祉の先達の志を継ぐこと、国の力にあまるたくさんの問題をかかえている現在の社会においてこそあらためてそれに学びそれを実践につなぐこと、これがこれから社会福祉法人の社会的認知を高め存在感を保持する方法ではないか、と提言を重ねたいところである。ではその先達はどんな人達であり、どんなあゆみをしたのか、歴史をひもといてたしかめあきらかにしていくことが大事になってくるのである。特に宗教心をベースにおいて献身した先達を発掘していくことである。

時の政治経済のなかではなばなしい役割をはたした著名な人々にくらべ市井において日々のくらしのなかで官沢賢治のように生きた人々、多くを語らず記録をのこさず、もくもく実践した人々はわすれられていく。それをすこしでもひろいだしはりおこしていくことは前にあげた新しい道をあゆむためのみちしるべとなるはずなのである。

三 中田驥郎の福祉実践

ここでその例として日蓮信仰をもとに全国的な福祉活動を創業した人、中田驥郎についてとりあげてみたい。

静岡県歴史人物事典（静岡新聞社刊）には次のように表現されている。

(1) プロフィール

「中田驥郎」（なかだ ろくろう）

一八八二（明治一五年）〜一九五七（昭和三二年）

弁護士、社会事業家、榛原郡勝間田村（榛原町）に生まれる。

東京法学院（中央大学）を卒業。二〇歳で弁護士開業。

一九〇六（明治三九年）社会事業を志す。社団法人救護会を設立、本部を静岡市に置く。

立、本部を静岡市に置く。

事業として、東京に授産所、施療所、大阪に第一保育園、静岡市に静岡託児所、

清水市に宿泊保護の清水自助館、清水保育園、母子ホーム報恩寮、授産所慶福寮、岐阜市、福岡市に宿泊保護施設、神戸市に神戸母子寮、大津市に妊産婦保護施設などを設置。

三二歳より日蓮の信仰に入る。

県弁護士会長、衆議院議員、大日本社会事業報国会理事長など

歴任。藍綬褒章受賞。

《説明》

参考にプロフィール文中、事業名にあげられてい事項の説明を付す。

1 宿泊保護事業

都市労働者で住むところのない人達のために低料金で宿所を提供するもの。のちに生活保護法のなかで宿所提供施設として位置づけらる

例① 清水自助館（清水市）大正一〇年設立

定員男女各二〇名 宿泊料一人一泊一〇銭

ラジオ、碁、将棋の倶楽室、浴場

② 岐阜自助会館（岐阜市）大正七年設立

定員四〇名

③ 福岡有隣館（福岡市）大正一五年設立

定員七〇名

2 授産事業

低所得者（かつてカード階級とよんだ）の自力更生をめざして職業訓練をおこない賃金を給した。

のちに生活保護法のなかで授産施設として位置づけられる。

例① 慶福舎（清水市）昭和一一年設立

鏝節箱製作の授産

定員一名

一日最高賃金五八銭 最低四銭

3 乳幼児保育隣保事業

宗教と福祉英銭（志田）

両親が働く間乳幼児の託児をうけ保育にあたる。のちに児童福祉法に保育所として定置づけられる。

例① 静岡託児所（静岡市）大正九年設立

生後六ヶ月より学齢期まで二四五名預かる

保育時間は日の出より日没まで

保育料一日 幼時五銭 乳児八銭

間食二回給与 昼食持参

② 清水保育園（清水市）昭和六年設立

在籍一五〇名 校外学習補導

家庭文庫 愛児貯金 内外齒科医の保健指導を併せて実施

③ 名古屋愛隣館（名古屋市）昭和一〇年設立

一〇〇名在籍 社会教化隣保事業併設

4 母子保護事業

戦争未亡人などの母子家庭の住まいを提供し子供の世話をおこなう。はたらく条件をととのえていく保護事業、のちに児童福祉法の母子寮（現在は母子生活支援施設）として位置づけられる。

例① 母子ホーム報恩寮（清水市）昭和一〇年設立

五部屋 使用料四畳半一日二円 六畳二円五〇銭

② 神戸母子寮（神戸市）昭和一〇年設立

一四部屋 月三元五〇銭

5 妊産婦保護事業

お産にあたり入院費用が十分でない妊産婦のための援助をおこなうものである

現在児童福祉法のなかで助産事業として位置づけられている。

例① 近江産院（大津市）昭和一一年設立

産室使用料一室一日三〇銭 減免制有

健康相談 巡回相談も実施

(2) 事業の基本

さて国や自治体の援助もない時代にどのようにしてこのような幅広い、東海道線につらなる各地に事業展開ができたのか、このあとをうらづける自伝、評伝の類のものがいまだに入手できない。

弁護士業のかたわら政治にも身を入れつつの社会事業を展開するには独力でなしうるものではない。財政的な面はなにがささえたのか、応援する人々はどのようなものだったのか、これから調査を必要とする点である。

唯一の証人として中田と行動を共にした人のなかに、東京武蔵野母子寮をつくり全国社会福祉協議会の部長職をもつとめた牧野修二に生前うかがったことがある。

『中田は熱心な日蓮宗の信仰をもって在家仏教徒として日蓮宗につながる会報等を主宰するなかで同志をつのるのが実にたくみであった。事業資金は大八車をひいて廃品回収を仲間でおこなうこと

ではじまった。さらに志しを同じくする人々の資金援助を多彩な人脈を活用してつづっていた。自分も静岡から東京まで大八車をひきながら上京し資金をえて母子寮開設につないだもので、運営体も救護会から東京都同胞援護会にうつり中田とはわかれることになった』と

当時の静岡社会事業協会の機関紙などをひもといてみるなかでわかったことは次のようなことである。

① 啓発活動のとりくみ

在家信仰の仲間と“光輪”という月刊誌を自ら主宰していた。

あわせて、静岡知識階級の社交クラブである興生会をはじめ“興生”という月刊誌をはじめている。いずれも刊行された誌がみつからないのであるが、この編集をとおして日蓮宗の信仰をベースに人脈を形成していったことが考えられる。

② よき仲間の存在

金子称総という社会事業家、東京市芝区新網町のスラム街に貧民学堂をはじめた人物としりあいとなってから救護会活動をはじめめるにいたったようである。当時の社会活動などに参加していた牧野のような青年が金子と同じように中田の考えに共鳴し参加したことがうかがわれる。

③ 資源回収が資金

救護会要覧の断片によれば廃品回収を中心とする事業資源開

発部を設置した県として 静岡、埼玉、愛知、岐阜、滋賀、兵庫、山口、福岡、の名があげられている。仲間が各地に同じ趣旨と方法で救済活動を展開したものと考えられる。中田はこう語っている「社会事業は独立自尊、資金を稼いで事業に投ずるもので他より援助をうけるものではない。相互扶助の精神で運営し物心両面からの救済でなければならぬ。」と。この考え方が同志をひろげていったのではないだろうか。

④ 日蓮信仰のもちぬし

「自分はひそかに日蓮聖人の弟子となった。まだ日蓮主義者たるにはあまりに貧しい信仰である。信仰は調和の名である。和合の名である。三味線の三つの絃が一つの音色に調って音楽となるごとく、信仰の世界は上中下の階級が渾然と一大融合体となる。信仰の極致はただ平和あるのみ。一切無差別である」と説き、当時の騒然とした社会貧富の差が大きく社会主義思想が大きな力をえていく時代に、信仰をもって平和をもたらしべきことをのべている。さらに「一切世間の行は法華経よりみれば皆宮仕えにひとしい。宮仕えが社会奉仕という名に代わっても本当の意味の奉仕がどれほど世の中に行われているか」ときびしくといかけている。確かな信仰心の持ち主であることをしめしているともいたい。

⑤ 社会事業のみかた

「社会事業精神とは眼前に反覆を起こして来る社会的欠陥に

対しこれが応急手当を施す事ではなく、かかる現象の動因となる源流の浄化に向かって深察し、その病根をなからしめることである。西行きの汽車に乗って東の都に到着すべく夢を描くをやめよ。その車を降りて車の方向に向き直ることが必要である。社会を形成する一切の人間に等しき幸福を与う事を目標とすべし。社会主義の対立的、斗争的なるに對し平和的なる所に存する。ガンジーの無抵抗なる弾力に存す。不正の圧迫に對し自然たる反発力をもつものである」とのべる。社会の不正をなくし平和平等の社会をつくることが社会事業の目標であり法華経の教えにつながるもの、と語っている。さらに「社会事業は営利を目的としない。弱者の保護救済にあたる。事業は貧困者の負担にたえられる程度の対価をえてすすめるべきもの」とも「人間生活の全体を助ける仕事である」と強調する。現在の時代において展開すべき福祉の事業の方向にも大いに参考となる内容をこめられているとうけとめられるのである。

⑥ 信仰とはなにか

「信仰は弱い人間の用心棒と考える人がいるがこれは一度も信仰をもったことのない人である。日蓮は一生信仰に生き人間の心の中の無知と闘った。もとめるものにあらずすべてをすてるところに信仰が成立する。強い人でなければできぬ業である。一切を捨てることからはじまる。」とのべている。また「日本はいつの間にか物質主義者のとりことなり、わが民族固

有の美しい信仰精神がほろびつつある。精神的な利益より金銭の如き現実的なものに幸福を感じる。仏教は無始無終の思想、時間的に無限思想であるごとく空間的にも無限である。日蓮聖人の出現によって本尊は宇宙である。宇宙はすなわち仏陀であるとされた。信仰心が本物になれば和せざらんと欲するもできなくなるはずである。一七条憲法の和をもって貴しと為すは本⁽⁶⁾当の信仰は争を減するとかんがえてのことである。」と。

(3) 信仰心が力

以上は当時の誌紙のなかからひろいだした中田の論説の一端である。中田の全体をかたるにはまだまだ資料不足である。

がしかしこの時代にこれだけの事業をおこし多くの庶民のくらしをたすけたという事績、そしてそのベースに深い信仰心があったということ、これは学ぶべきことを多くふくんでいると考えたい。己の利のためではなく他人のために汗を流す、そのこと自体に喜びをえていく考え方は昔もこれからも民間社会福祉事業をすすめるものにもとめられる思想である。その考えがもとになってすすめられる事業にはかならずや関係する地域の人々の心を動かし資金的援助にもサイフをひろげさせる力ともなるはずである。社会福祉法人たるものそこにこそこれからの社会の中で存在するねうちがもたらされるのであろう。

となればここに例としてあげた中田のようなまわりの人間をうごかし、共に荷を負うことに参加させる人間性、信仰心というものの

持ち主であることが大いに有利な立場となるのではないだろうか。

ここにいたってこの五〇余年無縁の状態であゆんできた宗教と福祉は大きく深くかわりをもってくる時代にはいった、と表現してもよいのではないだろうか。介護保険法が動き出すことによりだれもが保険料を負担する、という事実から介護の社会性にきづきはじめた人々、そして高齢社会がすすみまもなく日本人口の四人に一人は六五歳以上の高齢者が占められる、とされるなかでひとごとではない、国にたよるだけではどうにもならないことに気づいている地域住民。これからの人々の心をひきつけあらためて己もまたなにか行動しなければ豊かな生活はないと自覚するなかで参加をもとめ仲間となしうる社会福祉法人が期待される。

四 寺の地域活動への期待

そして地域のなかでは寺があらためて庶民のくらしをささえる福祉のセンターとなる役割が期待されていくのではないか、ということともあらためて提言させていただきたい。

寺としてどんな福祉活動ができるのだろうか、と真剣に考えてみることも意味のあることではないか、二一世紀になお地域に支持され、存在していくためにも、という提言なのである。貧しい筆者の頭に思いうかぶことは例えばこんなことである。

① かけこみ寺の再現

家庭の力が弱くなつていくなかで、子や老人の虐待、夫婦間の暴力などの事件がマスコミをにぎわしている今日である。一

○年前アメリカで社会問題となっていたものでもある。

被害者となる人々の公的な施設はある、しかし地域であるいて逃げることでできる場所がまずほしい。現代版かけこみ寺である。かつての東慶寺のような役割を今の寺がはたすことはむずかしいのだろうか。どの地域にもある社会的施設である寺がこのような社会的ニーズにこたえることとなれば、存在感が増し、生きている信者の確保にもつながると考えるがいかなものか

② 寺子屋の再現

不登校という言葉が大きくなりあげられるようになって久しい。学校に行きたくても行けない子ら、この子らの学びの場、いこいの場、そして仲間づくりの場がもとめられる。

これも遠くに電車で通うというのではなく己が地域であればありがたい。こうした子らを寺がうけいれてもらえないものかということである。あわせて外国人の子弟の日本語を学ぶ場がないとされる。いま都会だけではない、どんな地域にも外国人労働力にたよる企業がふえている。中小企業では雇用だけで生活支援まで手をのばすゆとりがない。そこで定着しにくい問題もおこる程人間関係もさびしい。こうした人々をうけいれて、くらしの相談もうける、日本語の学習もする、実際の世話はボランティアを地域で募集することで十分対応できるはず。寺は場の提供とコーディネイトの役割をはたせば円滑に運営できる

のではないか。

③ 高齢者の活動拠点

昔からおとしよりは寺がたよりの存在、先祖の墓参りは名目、大黒さんとのお話し、おとしより同志のおしゃべりがめでであった。今、病院がその代わりの役をしているとされるが、あらためて大黒さんに奮起していただいてたまり場のにぎわいをとりもどすことはいかなものか。できればただおしゃべりの場ではなく社会に役立つことをリードすることである。まだまだ元気、エネルギーのあるおばあちゃんたちにできることはたくさんある。

1 寺には足をはこべず身体が弱って自宅にこもっている高齢者先輩を友愛訪問する。

2 定期に電話をかけ安否の確認をする。

3 寺の台所を利用してお昼のお弁当をつくりとどける。そしてお話しもする

4 境内で学童保育。低学年の子らは親が外にでていればカギツ子になる。この子らを相手に昔話をしたり、昔やったあそびをコーチすることも十分やりがいをとまなう奉仕である。

④ 託児所の再現

高齢者がふえることは地域社会を豊かにするチャンスでもある。己が生活のため家をでて稼ぎにくいことがない人々であ

る。この高齢者が地域で社会活動をボランティアで推進することになれば、こんなにすばらしいことはない。実家の親が入院するので急ぎとんでいかなければならない、という母親から一時預かりで赤ちゃんを寺の広い空間で世話してあげるなどは容易であろう。お寺から声がかかれば高齢者はみな重い腰をあげるはずである。いま国の制度までになった保育所もお寺の農繁期託児所がはじまりだった。

法的な施設としての保育所でできにくいことをあらためて寺でとりくむのである。夜だって高齢者の協力があれば緊急にあずかることも可能であろう次の世代の健全な発達を高齢者の世代がささえてあげる、なかなかナウイとりくみである。世代間の交流が叫ばれる中で、寺こそその役割と手をあげてみるのはどうであろうか。

(5) 地域生活の守り手

ある寺の前に高齢者二人ぐらしの世帯があった。夜の出火でおじいさんが亡くなりおばあさんがやけだされた。遠くに住む息子夫婦が到着するまで寺であずかってほしいと地域の人々が交渉したが不調だった。檀家でないことが理由だったとか。これではなんのための寺ぞとなる。檀家にこれからなるかもしれないお客様と思えばすすんでおひきうけします、というのが得策だったのではないか。なにごとか困ったことがあれば寺にあつまる、そこから対策が生まれみんなの生活が守られる、といった地域住民の生活の守り手として

の寺。この機能をこれまで以上に意図的にとりくむ姿勢というものがのぞまれる。いま行政の仕事として法律にくみこまれ税金で対応されている分野が行政の手にあまる時代になっている。このこぼれる部分を寺を中心とする地域のささえあいでもカバーすることがとても大事になっている。

(6) 運営は信用貨幣で

そんな事業をやるのもけっこうだが金はどうする。寺ではとても負担できないという言葉への回答は中田の言葉で十分ではないだろうか、利用者の負担にたえられる範囲で応分の利用料を徴すればよいのである。ボランティアとなる高齢者に金までもたせることはないのである。そして高齢者の協力に対しては今よくとりあげられている労働銀行方式、奉仕の時間の預託制度などを活用すればよいのではないか。今ヤングオールドがオールドオールドを世話する方式は北欧などでは一般化している。元気なおばあさんはあなたがもし大変になったら次の世代から世話してもらおうにしますよ、と大黒さんにいわれれば安心するしますますはりきる、ということになるにちがいないのである。商品経済の貨幣ではない地域の信用の貨幣で寺を拠点とした地域福祉活動は十分可能と考える。

金がなくても人手がなくてもできる寺のはたらき、という提言である。

おわりに

以上、社会福祉法人、そして寺への期待という表現でこれからの特徴をだしての運営の方向にいくつかの提言をさせていただいた。

社会福祉法人には宗教心、またはそれにかわる人間尊重、人権を大事にする理念をもとにした地域の人々の心にとどく明確な方向づけをすることが大事ではないか、と

寺には、生きている地域住民の信頼をより豊かなものにするためにも福祉的な視点、地域住民の生活の守り手としての新しいニーズをとらえての日常活動が必要なのではないか、ということである。

宗教と福祉は昔にあったように密接なつながりを現代の社会でこそとめられるときにきているのではないか、ということでもある。

筆者のおもいつきではあるが中田の事績をかいまみるなかで考えたことをのべてさせていただいて研究ノートとしての筆をおえたい。宗教と福祉の二一世紀における相互作用にもとづいての発展を心から願うの筆である。(平成一二年九月記)

引用資料

- (1) 日本社会福祉士会ニュース No. 五〇 平成一二年九月
- (2) 社団法人救護会要覧 昭和一四年
- (3) 静岡社会事業 財団法人静岡県社会事業協会 昭和四年八月号
- (4) 静岡社会事業 昭和八年一月号
- (5) 静岡社会事業 昭和一二年一月号
- (6) 静岡社会事業 昭和一〇年三月号